



Title	楚の遠祖陸終とその妻女嬃の伝説に関する一考察 : 清華簡『楚居』を手がかりとして
Author(s)	徐, 少華
Citation	中国研究集刊. 2016, 62, p. 18-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61980
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〔出土文献研究〕

楚の遠祖陸終とその妻女嬪の伝説に関する一考察

——清華簡『楚居』を手がかりとして

徐 少 華

（草野友子 訳）

清華大学が所蔵する戦国竹簡（清華簡）『楚居』は、二〇一〇年末に刊行されて以来^{〔注1〕}、国内外の学术界において大きな注目を集めている。そのため、すでに多くの論文が各種期刊やインターネット上に発表されており^{〔注2〕}、関連する問題についての深い認識と理解を推進した。しかし、古史が茫漠としていることにより、疑問点は甚だ多く、数多くの問題が詳細な研究や推敲、考古資料による実証を待っている状態である。

本稿は、伝世文献とすでにある研究成果とを結合し、簡文の「季連初降於驪山」の記載と伝世文献に見える「楚人の遠祖陸終が鬼方氏の妹女嬪を娶った」という伝説について分析・検討するものである。『楚居』が提供

する情報を用いて、関連する学術上の難解な問題を解決し、楚史・楚文化研究の進展を促したい。

一、陸終が娶った女嬪の族属

伝世文献と出土文献によると、楚国の王族は、祝融八姓の一人、季連の後裔であり、半姓であるとされる。『史記』卷四〇・楚世家に次のように言う。

楚之先祖出自帝顓頊高陽。……高陽生稱、稱生卷章、卷章生重黎。重黎爲帝嚳高辛居火正、甚有功、能光融天下、帝嚳命曰祝融。共工氏作亂、帝嚳使重

黎誅之而不盡。帝乃以庚寅日誅重黎、而以其弟吳回爲重黎後、復居火正、爲祝融。

吳回生陸終。陸終生子六人、圻剖而產焉。其長一曰昆吾。二曰參胡。三曰彭祖。四曰會人。五曰曹姓。六曰季連、半姓、楚其後也。^{注3}

（楚の先祖は帝顓頊高陽より出づ。……高陽は稱を生み、稱は卷章を生み、卷章は重黎を生む。重黎は帝嚳高辛の為に火正に居り、甚だ功有りて、能く天下に光融し、帝嚳は命けて祝融と曰う。共工氏乱を作すや、帝嚳は重黎をして之を誅せしめ、而も尽さず。帝は乃ち庚寅の日を以て重黎を誅し、而して其の弟吳回を以て重黎の後と爲し、復た火正に居り、祝融と爲る。

吳回は陸終を生む。陸終は子六人を生み、圻剖^{きまき}して焉^{これ}を産む。其の長ずる一を昆吾と曰う。二を參胡と曰う。三を彭祖と曰う。四を會人と曰う。五を曹姓と曰う。六を季連と曰い、半姓なり、楚は其の後なり。）

この段の記載は、周代の楚人と太古の祝融集団との淵源関係について明言している。その間には伝説の色彩があるものの、関連する文献と考古資料によってこれを証

明すると、主な内容はおおよそ誤りがない。

たとえば、『左伝』僖公二十六年に「夔子不祀祝融與鬻熊、楚人讓之（夔子祝融と鬻熊とを祀らず、楚人之を讓む）。」と、また「帥師滅夔、以夔子歸（師を帥いて夔を滅ぼし、夔子を以て歸る）。」とあり、杜預注に「祝融、高辛氏之火正。楚之遠祖也。……夔、楚之別封、故亦世紹其祀（祝融は、高辛氏の火正なり。楚の遠祖なり。……夔は、楚の別封、故に亦た世よ其の祀を紹ぐ）。」とある。

二〇世紀の一九八〇年代に湖北省荊門市で出土した包山楚簡の卜筮祭祷簡には、「與祷楚先老僮・祝融・鬻熊、各一牂」とある^{注4}。老僮が卷章であることによれば（詳細は後述）、簡文に見える三人の「楚先」の順序と名稱は文献の記載と一致する。このことから、東周から秦漢時期に至るまで、人々は楚族の起源と展開について比較的よく知っており、関連文献の記載は基本的に信用できるものであることがわかる。

また、『大戴礼記』帝繫に、次のように言う。

顓頊娶於滕氏、滕氏奔之子、謂之女祿氏、產老童。老童娶於竭水氏、竭水氏之子、謂之高緡氏、產重黎及吳回。吳回氏產陸終。陸終氏娶於鬼方氏、鬼方氏

之妹、謂之女隤氏、產六子、孕而不粥（育）、三年、啓其左脅、六人出焉。其一日樊、是爲昆吾。其二曰惠連、是爲參胡。其三曰錢、是爲彭祖。其四曰萊（求）言、是爲云鄩人。其五曰安、是爲曹姓。其六曰季連、是爲牟姓。……季連者、楚氏是也。^{（注5）}

（顓頊は滕氏に娶り、滕氏奔の子、之を女祿氏と謂い、老童を産む。老童は竭水氏に娶り、竭水氏の子、之を高緇氏と謂い、重黎及び呉回を産む。呉回氏は陸終を産む。陸終氏は鬼方氏に娶り、鬼方氏の妹、之を女隤氏と謂い、六子を産み、孕めども粥（育）せず、三年にして、其の左脅を啓き、六人出づ。其の一を樊と曰い、是を昆吾と爲す。其の二を惠連と曰い、是を參胡と爲す。其の三を錢と曰い、是を彭祖と爲す。其の四を萊（求）言と曰い、是を云鄩人と爲す。其の五を安と曰い、是を曹姓と爲す。其の六を季連と曰い、是を牟姓と爲す。……季連なる者は、楚氏（是）なり。）

『大戴礼記』のこの段の話と先に引用した『史記』の記載とを比較すると、おおむね同じではあるが、細かい点が異なる。第一に、『大戴礼記』帝繫の内容はさらに詳細であり、顓頊・老童・陸終らの家系の姻戚関係の旧

族を示しているだけでなく、昆吾・參胡・彭祖らの人あるいは支系の名称も記載している。第二に、「老童」が「卷章」に代わっており、裴駰『史記集解』は徐広を引いて「『世本』云老童生重黎及呉回（『世本』は老童重黎及び呉回を生むと云う）。」^{（注6）}と言ひ、また譙周を引いて「老童即卷章（老童は即ち卷章なり）。」^{（注7）}と言ひ。司馬貞『史記索隱』は「卷章名老童（卷章の名は老童なり）。」^{（注8）}と言ひ。すなわち老童と卷章とは名・字あるいは号の關係に当たる。第三に、『大戴礼記』帝繫は顓頊と老童の間に「稱」の一代がなく、『世本』の記載は『大戴礼記』帝繫と同じであり^{（注9）}、これは記載に欠失があるのか、それともこれらの学者の太古の史実についての見解に違いがあるのかは不明である。

「女隤」については、『史記』楚世家の「陸終生子六人」の句の下に、司馬貞『史記索隱』と『太平御覽』は「『世本』を引いて「女隤」に作り^{（注10）}、隤と嬪とは通用し、ただ偏が異なるのみであることを明示している。

鬼方は、上古時期に北方において強大であつた狄族であり、伝世文献・甲骨卜辞・銅器銘文にみな見え、学者たちの研究によると、それは媿姓の族、あるいは「媿姓の国」であるとされる^{（注11）}。

媿姓の「媿」は、文献では多く「隤」に作り、また

「歸」に作る。『左伝』僖公二十三年に「狄人伐麇咎如、獲其二女叔隗・季隗、納諸公子（狄人 麇咎如を伐ち、其の二女叔隗・季隗を獲て、諸を公子に納る。）」と、その杜預注に「麇咎如、赤狄之別種也、隗姓（麇咎如は、赤狄の別種なり、隗姓なり）。」とある。また、『史記』卷三九・晋世家の「狄伐咎如」の句の下に、裴駰『史記集解』は賈逵を引いて「赤狄之別、隗姓（赤狄の別は、隗姓なり）。」と言う。『国語』鄭語は周の太史の史伯が「北有……潞・洛・泉・徐・蒲（北に……潞・洛・泉・徐・蒲有り）」と言うのを載せ、その韋昭注に「皆赤狄、隗姓也（皆赤狄、隗姓なり）。」とある。諸篇が用いている「隗」字は、銅器銘文や古姓によるとすべて「女」を偏とするのが通例であり、実際には「媿」に作るべきである。

淮河中流の北岸、今の安徽省阜陽市の西北にあった古胡国は、文献では「歸姓」を称している^{〔注10〕}。胡は、金文では「𡗗」に作り、一九七八年に陝西省武功県任北村の西周銅器窖藏から出土した𡗗叔簋銘には「𡗗叔𡗗姬作伯媿媿簋、……。」とある^{〔注11〕}。

この簋は、𡗗叔夫婦がその長女「伯媿」が外に嫁ぐ際に作成した媿器であり、媿器の銘文の字を称する慣例によると、「伯」は長幼の順序、「媿」は𡗗国の姓である。

「媿」は古くは「愧」に通じ^{〔注12〕}、また借りに「歸」に作り、『戦国策』秦策一「蘇秦始將連横」章の、「狀有歸色」の句の下の高誘注には、「歸當終媿。媿、慚也。音相近、故作歸耳（帰は当に終に媿すべし。媿は、慚なり。音相近く、故に帰に作るのみ）。」とある^{〔注13〕}。帰姓胡国の「歸」は、実は「媿」の同音の仮借字であり、李学勤氏は銘文に見える媿姓の「𡗗」は、「まさしく文献中の帰姓の胡国である」と見なしており^{〔注14〕}、これは信じるに値する。

鬼方が媿姓の国あるいは部族である以上、陸終が娶った鬼方氏の妹は、媿姓の女子に属する。かつて王国維氏は次のように述べている。

《世本》陸終娶鬼方氏之妹、謂之女嬪、《大戴禮・帝繫篇》及《水經注・洧水》條所引作女嬪、《漢書・古今人表》作女潰、而《史記・楚世家》索隱與《路史・後紀》所引皆作女嬪、鬼、貴同聲、故媿字亦通作潰、則女嬪、女潰疑亦女媿、女隗之變。……嬪、潰二字其音與媿、隗絶近、其形亦與媿、隗二字變化相同、或殷周間之鬼方已以媿爲姓、作《世本》者因傳之上古也^{〔注15〕}。

陳夢家氏は王国維氏の説に同意し、さらに「隤・隤・隤・懷都是鬼姓」(隤・隤・隤・懷はすべて鬼姓である)と推測している^{注16}。

女隤・女嬪が女隤・女隤の異写である以上、その意味は隤姓の女子であり、すなわち先に引用した『左伝』の「叔隤」・「季隤」、猷叔簋銘の「伯隤」と近似しており、上古時期の婦の名を国と姓で称すという基本規律を表している。

諸々の記載は陸終が女嬪(隤)を娶つて六子を生んだと言っており、季連はその最後の一人である。文中の「生」の字は、生みの母と理解でき、また支系の派生と見なすことができるが、どのような解釈であろうと、陸終の六系には一定成分の鬼方氏の血統が備わっており、半姓季連の系も例外ではない。張正明氏は「鬼方は西北民族であり、後世に隤姓の戎人がいる。隤は嬪に通じ、女嬪はつまり隤姓の戎人の女とすべきである。このことから、陸終の集落連盟は、同じ鬼方の集落連盟が婚姻を結んで繁栄してきたものであることがわかる。」と述べており^{注17}、これは理にかなっている。

「女嬪(隤)」は戎狄の族の鬼方氏の出身であり、これは疑いないが、鬼方氏のどの支系に属するのか、当時どこに居住していたのか、ということについては、早期の

文献中には明確な意見がない。清人の孔広森『大戴礼記補注』に「鬼方、西落鬼戎。宋衷曰、「於漢、則先零羌是也。」(鬼方は、鬼戎に西落す。宋衷曰く、「漢に於いて、則ち先零羌是れなり。」と。)」とあり^{注18}、鬼方はすなわち西北に居住していた鬼戎・漢の先零羌であると見なされているが、曖昧ではつきりしない。今、ある学者はこれによつて季連の母族の鬼方氏は西羌集団に属し、半姓であり、また季連の姓は鬼方氏に来源があると推測している^{注19}。これについては、羅運遷氏がかつて分析して「春秋時代の赤狄、商代の鬼方、季連の母族はみな同一族系であり、……おそらくこれは季連の母族の鬼方氏は西羌集団に属さず、北狄集団に属し、姓は半姓ではなく嬪であることを表している」と述べており^{注20}、これは信用できる。しかし、女嬪(隤)の族の派系と居住地については、学者はみな言及することが少なく、さらなる分析・検討が待たれる。

二、季連の驪山居住と女嬪の来源の分析

清華簡『楚居』には、「季連初降於鄆(隤)山、氏(抵)于空(穴)窮(窮)」という記載がある^{注21}。「初降」には、楚の始祖が天から降りてきたという神秘的な

色彩がある上に、その族がはじめに居住した地の史実背景もあり、『国語』周語上の「昔夏之興也、融降于崇山（昔夏の興るや、融崇山に降る）」の記載と近い。その意味は、半姓の始祖の季連氏は祝融集団から分派した後、はじめに鄆（驪）山一帯に居住していたということである。

「鄆山」はすなわち驪山であり、整理者は『山海経』西山経の「西次三経」が言うところの驪山であると推測しており、この山が「神耆（老）童居之」であるという関係から分析すると、確かに一定の道理はある。しかし、驪山が「三危之山」以西、「天山」以東に位置するという形勢から見ると（^{注22}）、およそ今の甘粛省の西境に当たり、文献が記載する祝融集団の故墟、すなわち今の河南省新鄭から嵩山一帯までは、距離が甚だ遠く、人に疑念を抱かせる。

簡文が記載する季連氏がはじめに居住した驪山は、上古時期の中原の名山の一つである驪山と見なすことができる。『国語』鄭語は鄭の桓公とその大臣の史伯が東遷して災禍を避けることについて議論している時のことを記載し、当時の號・鄆の地は「主芣・驪而食漆・洧（芣・驪を主として漆・洧を食う。）」と言い、韋昭注に「芣・驪、山名。」とある。すなわち、芣・驪の二山を望

祭の神主としており、西周時期の「驪山」が中原の望山の一つであり、非常に名声があつたことを示している。

『山海経』中山経の「中次七経」には「又東三十里曰大驪之山、其陰多鐵・美玉・青瑩……（又東三十里大驪之山と曰い、其の陰鉄・美玉・青瑩多く……）」と、その郭璞注に「今滎陽密県有大驪山、……（今の滎陽密県に大驪山有り、……）」とある（^{注23}）。清人の郝懿行『山海経箋疏』には、『地理志』云河南郡密有大驪山、溍水所出（『地理志』は河南郡密に大驪山有り、溍水の出づる所なりと云う。）」とある。また、『莊子』徐無鬼に「黃帝將見大隗乎具茨之山、……至於襄城之野、七聖皆迷、無所問途（黃帝は將に大隗を具茨之山に見えんとし、……襄城の野に至りて、七聖皆迷い、途を問う所無し。）」と、唐の成玄英『莊子疏』に「大隗、古之至人也。具茨、山名也、在滎陽密縣界、亦名泰隗山。……今汝州有襄城県、在泰隗山南、即黃帝訪道之所也（大隗は、古の至人なり。具茨は、山名なり、滎陽密県の界に在り、亦た泰隗山と名づく。……今汝州に襄城県有り、泰隗山の南に在り、即ち黃帝の訪道の所なり。）」とある（^{注24}）。

『漢書』卷二八・地理志上に見える河南郡「密」県については、班固の原注に「有大驪山 溍水所出、南至臨潁入潁（大驪山有り、溍水の出づる所にして、南は臨潁に至り

穎に入る。』と、顔師古注に「颯音颯、颯音翼。」と^{注25}、『説文解字』巻二・水部颯条に「水出河南密縣大颯山、南入颯（水は河南密県大颯山より出で、南は颯に入る）」と^{注26}、『水経注』巻二二・颯水篇の経に「颯水出河南密縣大颯山（颯水は河南密県の大颯山より出づ）」と、注に「大颯、即具茨山也（大颯は、即ち具茨山なり）」とある^{注27}。

この颯山はつまり具茨山であり、また大颯（颯）山・泰颯（颯）山とも呼ばれ、太古の至人の大颯が居住する所として有名であった。それは漢の密県の境に位置し、また襄城と隣接している。

『元和郡県図志』巻五の河南府密県「大颯山」の条に、「在縣東南五十里。本具茨山、黄帝見大颯于具茨之山、故亦謂之大颯山、颯水源出于此（県の東南五十里に在り）。本具茨山、黄帝は大颯を具茨之山に見え、故に亦た之を大颯山と謂い、颯水の源は此より出づ。）」と言う^{注28}。『讀史方輿紀要』と『大清一統志』の記載を結合すると^{注29}、唐の密県の東南五十里の大颯山に位置し、今の河南密県・禹県と新鄭の境に接する槐樹嶺・劉垌・史垌などの村一帯であると推測できる^{注30}。密県の境内は、この附近に今は大颯鎮があり、大颯（颯）山の所在と密接に関連すると考えられる。

このことから、半姓季連氏の一系が早期に居住していた「鄴山」（颯山）は、まさにその先祖の祝融がかつて長期的に活動していた今の河南省新鄭と嵩山との間に位置し、またその同族の昆吾・鄩人らの諸支系との距離が遠くないことがわかる^{注31}。この史実の確認は、一連の関連する記載とともに裏付けになるものである^{注32}。

『莊子』の他に、黄帝が大颯に面会する故事は「抱朴子」にも見え、本書内篇巻一三・極言に「昔黄帝生而能言、役使百靈、……之具茨而事大颯、適東岱而奉中黄（昔黄帝は生まれて能く言い、百靈を役使し、……具茨に之きて大颯に事え、東岱に適きて中黄を奉ず）」と言う。また巻一八地真に「昔黄帝東到青丘、……北到洪堤、上具茨、見大颯君・黄蓋童子、受神芝圖（昔黄帝は東は青丘に到り、……北は洪堤に到り、具茨に上り、大颯君・黄蓋童子に見え、神芝図を受く。）」と言う^{注33}。この伝説は古代の道家文献の中に見え、比較的流行していたものであることがわかる。

「大颯」が具茨山に移り住んだことから、具茨山は颯山・大颯（颯）山・泰颯（颯）山とも称される。大颯すなわち大颯・大鬼は、西北鬼方氏の一系が南下してきたものであり、『抱朴子』はそれを「大颯君」と称し、その居住地が「大颯（颯）山」と称されているのはその証

拠であると考えられる。もし大隗が隗山に居住したという故事と筆者の推測とがおおよそ誤っていないければ、氏族社会の晩期に、ある一系の鬼方氏の族人が南に向かつて発展し、黄河を越え、中原の中央に進入し、今の密県・新鄭・禹県の境に接する所の具茨山一帯において活動したことを証明していると考えられる。商周時期に、嵬姓の族人はさらに南に向いて発展し、相次いで淮河上流地区において嵬姓の復・胡・弦の諸国を建立したことも^(注34)、大隗すなわち鬼方の支系が早期に中土に進入し、具茨山一帯において活動したという有力な傍証となるであろう。そうでなければ、これらの人々の群れが西北部から中原を越えて淮河上流に到達するのは難しいことである。

黄帝がわざわざ大隗に面会に行ったかどうか、また神芝図を受けたかどうかなどは、必ずしも確実ではなく、パロデーの成分があると見られる。しかし、黄帝の部族と大隗の一系とは同じ中原の土地にいて、隣接していたため、互いに交流があったと考えるのが自然であろう。

鬼方氏の支族の大隗一系がかつて隗(隗)山一帯において活動し、『楚居』が楚の先祖の季連ははじめに隗山に居住していたと言っている以上、両族は同じ一つの比

較的小さな区域範囲内において、互いの距離は遠くなかった、あるいは互いに隣接していたと考えられる。このようであれば、『大戴礼記』や『世本』などが記載する陸終が娶った鬼方氏の妹女嬪(嬪)は、隣接する大隗の族の出身である可能性があるかと推測できる。まず、大隗・女嬪(嬪)はみな鬼方氏の支系の嵬姓の族人で、同族同姓である。次に、大隗一系は今の密県・新鄭の間の古具茨之山(隗山)一帯において活動し、さらに陸終の族の中心は今の新鄭一帯にあり、両者は互いの距離が約四〇里前後、往来するには近くて便利であり、相互に婚姻関係を結んでいた可能性が高い。もし陸終氏が近きを捨てて遠きを求め、晋陝北部の鬼方氏の中心地域に赴いて婚姻関係を成立させようとするならば、上古の立ち後れた状態と困難な交通条件の下では、想像しがたいものである。このことから、陸終が娶った鬼方氏の妹女嬪(嬪)は、まさしく祝融集団の居住地と隣接する大隗(嵬)一系出身の女子であったと見なすことができる。

陸終の後裔の季連氏として、血縁の角度から言うところ、陸終の末子である以上、鬼方氏の後裔(外孫)でもあり、その族がしだいに独立・分家した後、最初にその母族が居住する隗山一帯において活動したのは、頼ったり協力を得たりすることを願ったためであり、これは道理

にならなっている。あるいは、陸終の族人の中の最も年少の一派は、はじめはその母族と同居して成長し、たとえ独立して家を興し業を立てた後であっても、なお驪山附近において一定期間、活動していたとも考えられ、これが『楚居』の「季連初降於鄆（驪）山」の歴史的背景なのかもしれない。

結語

以上の分析の結果、次のことが明らかになった。

清華簡『楚居』が記載する楚人の先祖季連がはじめに降りた驪山は、今の河南省密県と新鄭・禹県の間の古具茨山に位置し、氏族社会の晩期に鬼方氏の支系の大隗（驪）の族人が南下してこの一帯に居住・活動したため、驪（驪）山・大隗（驪）山、あるいは泰驪（驪）山と呼ばれている。これは上古時期の中原で有名な望山の一つであり、非常に名声があつた（図1参照）。

歴史・地理の角度から推測すると、『大戴礼記』や『世本』などが記載する楚人の遠祖陸終が娶つた鬼方氏の妹女嬪（驪）は、驪（驪）山一帯の大隗の族人の出身であると考えられる。陸終氏が居住する「鄭」（今の河南新鄭）と大隗君が南下後に居住した驪（驪）山とは、

互いの距離が四〇里前後で、近隣であつたため、往來するのに便利であり、相互に婚姻関係を結んでいたと考えるのは十分可能である。

陸終の幼子あるいは比較的遅くに分かれた半姓の季連氏として、長期的に驪（驪）山一帯に居住・活動し、その母族の鬼方氏の大隗（驪）一派とは特に親密で頼りにしている間柄であつたのかもしれない。季連氏と大隗の族系とのさらに進んだ通婚・融合もまた免れがたいものであると想像できる。このように、季連の族人は祝融八姓中の他の支系と比較すると、戎狄鬼方氏の血統を濃厚に有していることは明らかであり、これは半姓楚人の族系の淵源とその文化の痕跡を探る際に軽視できない要素である。

注

- (1) 清華大學出土文獻研究與保護中心編・李學勤主編『清華大學藏戰國竹簡(壹)』、中西書局、二〇一〇年、原寸大図版、二六～二七頁、釈文注釈、一八〇～一九四頁。
- (2) 李學勤『論清華簡《楚居》中的古史伝説』趙平安「試釈《楚居》中的一組地名」、李守奎「根據《楚居》解讀史書中熊渠至熊延世序之混亂」(いずれも『中國史研究』二〇一一年第一期掲載) 参照。
- (3) 『史記』、中華書局、一九六二年、一六八九～一六九〇頁。引用文の中の横線は、筆者が加えたものである(以下、同じ)。
- (4) 湖北荊沙鐵路考古隊『包山楚簡』第二七簡、文物出版社、一九九一年、三四頁参照。このほか、第二三七簡にも見える。
- (5) 王聘珍『大戴礼記解詁』卷七・帝繫、中華書局、一九八三年、二七～二九頁。
- (6) 『史記』、一六八九頁。
- (7) 『太平御覽』卷一三五「顓頊妃」条引「世本」、中華書局、一九六〇年、六五五頁。
- (8) 『史記』、一六九〇頁。『太平御覽』卷三七「魯」条引「世本」、一七二頁。
- (9) 王国維「鬼方昆夷獫狁考」(『觀堂集林』掲載、中華書局、一九五九年、五八三～六〇六頁)、陳夢家『殷墟卜辭綜述』、第八章第五節四「鬼方」(中華書局、一九八八年、二七五頁) 参照。
- (10) 『史記』卷三六・陳杞世家、司馬貞『史記索隱』引「世本」、一五八二頁。王符著、汪繼培箋『潜夫論箋』卷九・志氏姓、中華書局、一九七九年、四五六頁。
- (11) 盧連成・羅英傑「陝西武功県出土楚蠡諸器」(『考古』一九八一年第二期) 参照。
- (12) 『漢書』卷四・文帝紀に「以不敏不明而久撫臨天下、朕甚自媿」とあり、顔師古注に「媿、古愧字。」とある(中華書局、一九六二年、一二六頁)。
- (13) 『戰國策』、上海古籍出版社、一九八五年、八六頁。
- (14) 李學勤「從新出青銅器看長江下游文化的發展」、『文物』一九八〇年第八期。
- (15) 王国維「鬼方昆夷獫狁考」、『觀堂集林』掲載、中華書局、一九九一年、五九一～五九二頁。
- (16) 陳夢家『殷墟卜辭綜述』、二七五頁。
- (17) 張正明『楚史』、湖北教育出版社、一九九五年、二二頁。
- (18) 孔広森『大戴礼記補注』、中華書局、二〇一三年、一三八頁。
- (19) 一之「楚人源於羌族考」、『青海民族学院学报』一九八一年第一期。趙炳清「楚人先民溯源略論」(『民族研究』二〇〇五年第一期) にも同様の見解がある。

(20) 羅運還『楚国八百年』、武漢大学出版社、一九九二年、四六頁。

(21) 清華大學出土文獻研究與保護中心編・李學勤主編『清華大學藏戰國竹簡(壹)』、中西書局、二〇一〇年、原寸大図版、二六～二七頁、釈文注釈、一八〇～一九四頁。

(22) 郝懿行『山海經箋疏』卷二・西山經、中国書店、一九九一年影印本、二七～二八頁参照。

(23) 郝懿行『山海經箋疏』卷五・中山經、二八頁。

(24) 郭慶藩『莊子集釈』、『諸子集成』第三冊収録、中華書局、一九五四年、三五九～三六〇頁参照。

(25) 『漢書』、中華書局、一九六二年、一五五六～一五五七頁。

(26) 『說文解字』、中華書局、一九六三年、二二五頁。

(27) 『水経注』、上海古籍出版社、一九九〇年、四二八頁。

(28) 『元和郡県図志』、中華書局、一九八三年、一三五頁。

(29) 『読史方輿紀要』卷四七、開封府新鄭県「大駟山」条、中華書局、二〇〇五年、二二七二頁、および『嘉慶重修一統志』卷一八六、開封府山川「大駟山」条、中華書局、一九八六年、九一四五頁参照。

(30) 『河南省分県地図冊』(内部用)、河南省測絵局編絵印刷、一九八二年、五五～五六頁、五七～五八頁参照。

(31) 昆吾・鄧人の諸支系の居地については、詳細は拙稿「論祝融八姓の流変与分布」、湖北省考古学会選編『湖北省考古学会論文選集』(三)、『江漢考古』増刊、一九九八年、一二二～一

三九頁参照。

(32) 季連と駟山との関係については、拙稿「季連早期居地及相關問題考析」、『清華簡研究』第一輯掲載、中西書局、二〇一二年、二七七～二八七頁参照。

(33) 『抱朴子』、『諸子集成』第八冊収録、中華書局、一九五四年、五七頁、九二～九三頁。

(34) 詳細は、拙稿「復器・復国与楚復県考析」、『中央研究院歷史語言研究所集刊』第八〇卷第二号(二〇〇九年)、一九七～二一六頁参照。

【附記】本稿は、二〇一五年一〇月一六日・一七日に開催された「出土文獻与先秦經史国際學術研討会」(香港大学中文学院主催、香港中文大学歴史系中国歴史研究中心共催、於香港大学百周年校園)、および二〇一五年一月二日に開催された中国出土文獻研究学会の座談会(於大阪大学中国哲学資料室)で発表した論文(原題「從《楚居》析陸終娶鬼方氏妹女嬪之伝説」)に若干の修訂を加え、日本語に翻訳したものである。座談会の開催と『中国研究集刊』への寄稿をご提案くださった湯浅邦弘教授(大阪大学)、通訳・翻訳を務めていただいた草野友子博士(京都産業大学)をはじめとする関係者各位に対し、ここに感謝申し上げます。

本稿は、国家社科基金重大招標項「周代漢淮地区列国青銅

器和歴史・地理綜合整理与研究」(批准号:15ZDB032)、および武漢大学重大委托項目「两周漢淮地区列国青銅器和歴史地理探析」(二〇一六年)の段階的成果である。